

## 『一刀斎先生剣法書』訳注及びスポーツ教育的視点からの考察 (1)

竹 田 隆 一  
教育学部 生涯スポーツ講座  
長 尾 直 茂  
教育学部 国語教育講座  
(平成14年10月1日受理)

### 要 旨

剣道の技術に関する名辞は、非常に難解であり、円滑な技術指導の障害となることも考えられる。しかし、それは、剣道のもつ身体観や技術観などの文化的特性のあらわれととらえることができる。そこで、剣道技術指導書の先行形態である近世の武芸伝書を取り上げ、技術に関する名辞を考察することによって、剣道の文化的特性を明らかにすることを目的とした。

本稿では、一刀流の伝書である『一刀斎先生剣法書』取り上げたが、それは、一刀流が現代剣道の源流の一つに数えられるためである。ただ、流祖伊藤一刀斎みずからが書いた伝書というものは現在伝わらず、一刀流を理解するためには、その門人達の伝書によるしかないのである。そこで、一刀斎の門人古藤田俊直を祖とする唯心一刀流の伝書『一刀斎先生剣法書』を現代語訳し、技術に関する名辞をスポーツ教育の視点から考察することにした。その結果、従来から使用されている「事理」、「水月」、「残心」、「威勢」の意味内容が明らかになった。なお、今回の考察は、全16章のうち5章までである。

### はじめに

伊藤一刀斎景久を開祖とする一刀流が、近代剣道の成立に甚大な影響を及ぼすことは周知の事実である。しかし、一刀流の剣法理論の検討は、一刀斎の“生の言葉”を伝えた口伝の書などが現存しないためか、それほど活発に行われているとはいえない。したがって近代剣道における一刀流の影響の研究は、一刀流の剣法理論の確認という本質的かつ基礎的な作業を欠くゆえに、いったい一刀流剣法理論の何が近代剣道に伝わり、何が伝わらなかったのか、その点の検証に着手するための第一段階にも至っていないというのが現状であろう。この現状を打開するためには、一刀流の剣法理論を伝書によつて的確に把握すること - それも一刀斎の在世時により近い時期に執筆された伝書によつて把握すること - が必要不可欠の作業となろう。そこで本稿では、一刀斎の門人古藤田勘解由左衛門俊直を祖とする古藤田家の伝書で、寛文四年(1664)に成立した『一刀斎先生剣法書』を取り上げ、

これを現代語訳し随時これに補説を加えることにする。この作業は、前述の通り、一刀流の剣法理論を把握するための第一歩という意味を有する。

作業を進めるについては、凡例に記した通り、役割の分担を行った。すなわち『一刀齋先生剣法書』は古典籍であり、これを古典作品として厳密に解釈することを長尾が中心となって行い、その作業を踏まえてスポーツ教育に有用とされるマイネル（Kurt Meinel）のスポーツ運動学の視点から、技術に関する伝書中の名辞の意味内容を検討し、補説を施すことを竹田が中心となって行った。長尾の作業は現在の古典学の成果を活用して、この伝書を正しく読み解かんとするものであり、竹田の作業はスポーツ運動学の視点から江戸時代の伝書に説かれた技術に関する名辞の意味内容を解釈するものであり、ともに一つの試みとして、ここに提示するものである。

## 凡 例

訳注の底本には、今村嘉雄『日本武道大系』第二巻・剣術（2頁同朋舎，1982）に収録された、京都鈴鹿家所蔵本『一刀齋先生剣法書』を用いた。但し、句読点は適宜に改めた箇所がある。また、参考資料として杉浦正森『唯心一刀流太刀之巻』を用いたが、これも『日本武道大系』第二巻所収のテキストに拠る。ちなみに『一刀齋先生剣法書』は寛文四年（1664）に、『唯心一刀流太刀之巻』は天明三年（1783）に稿成ったものである。

本書は16章から成るが、これを適宜に段落に分ち、そこに語注、現代語訳、そして必要に応じて補説を加えた。

語注は長尾が担当し、補説は竹田が担当した。現代語訳は両者で検討、吟味した上、ここに掲出した。なお、抄訳ではあるが、本書の現代語訳を試みたものに、吉田豊『武道秘伝書』（徳間書店，1968）があり、適宜に参照した。

## 第 1 章

### （1）

夫れ当流剣術の要は事<sup>1</sup>也。事を行ふは、理<sup>2</sup>也。故に先づ事の修行を本として、強弱・軽重・進退の所作を能く我が心<sup>3</sup>に是を得て、而る後其事敵に因て転化<sup>3</sup>する所の理を能く明らめ知るべし。たとへ事に功ありと云ども、理を明に知らずんば勝利を得がたし。又理を明に知たりと云ども、事に習熟の功なきもの、何を以てか勝つ事を得んや。事と理とは、車の両輪・鳥の両翅のごとし。

### 【語注】

1) 事...底本は「わざ」と訓む。一般に「技術」と解されることが多いが、本稿ではスポーツ運動学における用語「技術」との混同を避けるため、敢えて「技」と訳しておく。

2) 理...「事」に対比するならば「ことわり」と訓むべきであろう。ものごとを行うための道理、正しい理論。真理。「事」と「理」とが不即不離の関係にあることを説くのは、仏教の影響であろう。例えば、中村 元・福永光司等編『岩波 仏教辞典』（岩波書店，1989）

では「事」を「個別的具体的な事象・現象」,「理」を「普遍的な絶対・平等の真理・理法」と定義し,「華厳宗では,事と理とは融通無礙の関係であると説き……普遍的な理と個別的な事とが一体不可分であることを強調し,事理もしくは理事の語は中国華厳宗の教理を代表する言葉の一つとなった(p455)と解説する。仏教にいう事理と,本書にいう事理とはその意味するところは異なるが,事と理とが不即不離の関係にあるという発想は一致する。加えて,北宋の程頤(1033~1107)がこうした華厳宗の思想に影響され,“事理一致”を説いたことも筆者の念頭にあったかもしれない。ただし,本書が直接的に典拠としたのは,沢庵宗彭『不動智神妙録』であろう。『不動智神妙録』は寛永15年(1638)頃に執筆され,柳生宗矩に与えられたものであるが,写本の形で世に流布し,本書の筆者もその一本を披見したものと考えられる。この『不動智神妙録』(日本武道学大系 第九巻)の中で沢庵は「理を知りても事の自由に働かねばならず候。身に持つ太刀の取まはし能く候ても,理の極り候所の闇く候ては相成まじく候。事理の二つは車の輪の如くなるべく候(p64)」という。文辞が似通うことから見て,本書の筆者がこの沢庵の言に影響を受けたことが明らかに看取されよう。

3) 転化…うつりかわる。変化しつつ推移する。ここでは敵の動きに応じて変化することと解した。この発想は,古くは中国兵家の書『三略』などに見えるもので,おそらく「天地神明にして,物と推移し,変動常無し。敵に因て転化し,事の先と為らず,動かば輒ち随ふ(『三略』上略)などあることを念頭に置こう。

#### 【現代語訳】

そもそも当流派の肝心な点は技にある。技をつかう(ために必要である)のは正しい道理である。そのため先ず第一に技の修得を基本として,強弱・軽重・進退などの動作を十分に自己の身体に会得して,そこではじめてその会得した技が敵に応じて変化するという道理を明確に理解すべきである。たとえ技に習熟するという長所があったとしても,道理を明確に理解していなければ勝利を手に入れることは難しい。また道理を明確に理解していたとしても,技に習熟していないものは,どうして勝つことができようか(到底できはしない)。技と道理とは,車の二つの車輪や鳥の二つの羽のような(不即不離の)ものである。

#### 【補説】

「事」は,「技術」ととらえられがちであるが,「技術」の概念規定は混乱し,統一が待たれるとの指摘もある<sup>1)</sup>。そこで,本論では,マイネルの理論に従い,スポーツ技術<sup>2)</sup>を合目的で経済的な運動課題解決の仕方であり,個人によって伝播され,公共性をもつものであるととらえる。この視点から解釈すると,ここで示される「事」は,習熟の位相<sup>3)</sup>をもち,練習対象としての目標運動であり,「技術」ではなく,課題解決のために遂行された運動経過や運動形態,あるいは「技」と理解できよう。また,「理」は,「技」の道理と考えることができるが,この「技」は,最高に習熟した運動経過や運動形態としての「技」であり,これを構成する理論と理解できる。

1) 技術の概念規定については,以下のように述べられている。

「これらの技術の内容をベネットは,次のようにまとめている。

## 個人的な運動習熟としての技術

指導内容として、一定領域の技能法則の総和としての技術

・・・(中略)・・・クーローも述べているように、概念規定に関してはかなり厳密な考察がなされているドイツ語圏においてさえ、技術という用語に対して多様な見解が示されており、その統一が待たれるところである。(金子明友, 朝岡正雄 編著(1990): 運動学講義, 大修館書店, p68)

2) スポーツ技術は、マイネルの理論によれば以下のように解釈されている。

「スポーツ技術は、ある一定のスポーツ課題をもっともよく解決していくために、実践の中で発生し、検証された仕方であると解される。その解決の仕方は、合理的でなければならない。つまり、それは、現行の競技規則の枠内で、合目的な、できるだけ経済的な仕方によって高いスポーツの達成を獲得するものでなければならない。(クルト・マイネル著, 金子明友訳(1981): マイネル・スポーツ運動学, 大修館書店, p261)

「用具、施設、ルール、戦術選手の能力といった、スポーツの達成を規定しているあらゆる要因を考慮して、特定の課題解決に現在のところ最も合目的だと判断された、ある具体的な運動の仕方。・・・(中略)・・・さらに、ある個人によって、実際に行われた運動経過それ自体は運動習熟といわれる。ある運動経過がある個人によってどれほど合目的、経済的に行われようとも、それ自体は他人に伝播されない限り、その人とともに消え去ってしまう運命にある。個人的に実現されたあるすばらしい運動習熟が他の人に伝播され、そこに個人的特殊条件によって左右されない、一定の公共性をもった運動形態が認められたときに、はじめて運動技術が問題になる。この意味の運動技術は、「図式技術」といわれ、それは客観的に定義された行為目標、理想型としてのモデルという機能をもった運動形態と解されて、運動学習においてその習得がめざされる。(運動学講義, p257)

3) 習熟の位相は、マイネルの理論によれば以下のように解釈されている。

「位相は、できるようになるのにかかわらず通り抜けなければならない運動学習の道程や発展段階を一般的に特徴づけているのである。・・・(中略)・・・新しい運動の習得は、一般的に、3つの特徴的な位相、あるいは発展段階を通過するものであり、それらは位相の主な内容に従って、次のように表される。

位相A: 粗形態における基礎経過の獲得: 運動の粗協調

位相B: 修正, 洗練, 分化: 運動の精協調

位相C: 定着と変化条件への適応: 運動の安定化(マイネル・スポーツ運動学, pp 374 - 75)

## (2)

事は外にして、是形也。理は内にして、是心也。事理習熟の功を得るものは、是を心に得、是を手に応ずる<sup>1)</sup>也。其<sup>いたる</sup>至に及んでは<sup>2)</sup>、事理一物にして内外の差別なし。事は即ち理也、理は即ち事也。事の外に理もなく、理を離れて事もなし。然れば術を学ぶ者、事一片に止りて理の正邪を知らず、或は著<sup>3)</sup>して事の得失を知らざること、是れ偏<sup>4)</sup>也。事理偏著する則は、敵に因て転化する事能はざる者也と。

## 【語注】

1) 手に応ずる...手の動きにしたがう。手の動くままに技を出す。通常、技が熟練するこ

とを比喩する。

２）其至るに及んでは...その極みに達する。この場合、「事理習熟」の究極に達すること。なお、この表現は四書の一、『中庸』第十二章の「其の至るに及んでは、聖人と雖も亦た知らざる所有り」を踏まえるか。

３）著...「着」に同じ。物事に執着する意であるが、ここでは道理にばかり執着すること。仏教用語では、心が物事にとらわれて離れないことをいい、愛著・著心などのように用いる。

４）偏...一方に傾くこと。仏教では、一方に固執した偏った見解を「偏執見」「偏見」という。『唯心一刀流太刀之巻』には「事理、中和を要す」とあり、「偏せず倚せず是を中と云。時に中するを和と云（p271）」と説明する。また、『不動智神妙録』においても「心を一所に置けば、偏に落とす云ふなり。偏とは一方に片付きたる事を云ふなり（同前、p68）」とあり、「偏」を戒める。

#### 【現代語訳】

技は外面的なものであって、これは形である。道理は内面的なものであって、これは心である。技と道理とに習熟することができた者は、これ（＝道理）を心に修得して、これ（＝技）を手に応用して（技に熟練して）いるのである。その（技と道理とに習熟する）極みに達した場合には、技と道理とは一つのものであって内面、外面の区別はなくなる。（この場合）技は、とりもなおさず道理であり、道理は、とりもなおさず技である。技以外のところに道理もなく、道理から離れたところに技もない。そうであるので剣術を学ぶ者が、技だけにとどまって道理の善し悪しを理解しなかったり、あるいは心にだけ執着して技の可否を理解しない場合、これは偏りということになる。技や道理に偏ったり、あるいは執着したりすれば、敵に応じて変化することができない者となってしまうと（先師一刀齋はいわれた）。

#### （３）

故に当伝の剣術は、先師一刀齋より以来、事理不偏<sup>1)</sup>を主要として、剣心不異<sup>2)</sup>に至る所の伝授を秘所とす。予<sup>3)</sup>、当流の末葉として此術を学ぶと云へども、愚才不功にして其妙所を知らず。雖然弟子の執心黙止<sup>もだし</sup>がたきに因て、伝来事理の大方を改て一紙に是を記す。実に管を以て天を窺ふ<sup>4)</sup>が如く、後見の嘲を求るに似たり。

#### 【語注】

１）事理不偏...技術、道理のいずれにも偏らないこと。前節において「事理偏著」することを戒めることに通ずる。前述の通り、『唯心一刀流太刀之巻』においては「事理要中和」（p271）」と説明する。

２）剣心不異...「剣」を剣を操作するための技術、「心」を道理と考え、技術と道理とを一致させることと解する。前節にいう「事理一物」の境地がこれに当たるか。後出、第２章（３）の「構心に不異之位」項をあわせ参照されたい。

３）予...謙譲の意を含む一人称。この書を記した古藤田弥兵衛俊定を指す。本書の識語には伊藤一刀齋景久、古藤田勘解由左衛門俊直、古藤田仁右衛門俊重、古藤田弥兵衛俊定と

あり、これは一刀流の極意が一刀斎から古藤田家へ、俊直 - 俊重 - 俊定と引き継がれたことを示す。この古藤田家に継承された一刀流（唯心一刀流）は、神子<sup>みこがみ</sup>上典膳忠明（のちに小野氏を称す）から伊藤典膳忠也（忠也派）、小野次郎右衛門忠常（小野派）へと展開する一刀流とは別系統である。ちなみに『唯心一刀流太刀之巻』の筆者である杉浦正森の父正備と叔父正景は、俊定の愛弟子であった。

4) 管を以て天を窺ふ... 管の小さな穴から天空をのぞき見るといふ意から、自己の見聞の狭いことをいう。管見。

#### 【現代語訳】

したがって当流派の剣術は、先師一刀斎以来、事理不偏ということを要点として、剣心不異に到達するための伝授を秘伝としている。私は、当流派に連なる者としてこの剣術を学んでいるが、愚かで何の長所もなく、まだその妙所も理解していない。そのような状態ではあるが弟子たちが熱心に教えを求める気持ちを捨て置くこともできず、よって伝来の事理のあらましを改めてここに書き記したのである。まことに、細い管の穴から天空を見るかのような狭い見解であり、後世これを見る人の嘲笑を進んで求めているようなものである。

#### 【補説】

「事理一物」、「事理不偏」、「剣心不異」は、課題遂行の運動経過（事＝形＝外）と最高習熟の運動経過や運動形態を構成する理論（理＝心＝内）が一致することを示している。これは、心と体の一体、あるいは心身一如を意味するものであり、ここに一刀斎の技の習練や技の捉え方の理念がうかがえる。

また、「理」を意識しながら習熟した運動形態を習得しようとするのが運動学習であると捉えると、「事理一物」は、運動学習の最終の習熟段階である運動の自動化<sup>1)</sup>がなされた段階を意味しているといえる。

- 1) 運動の自動化は、マイネルの理論では、「ある運動を行なうとき、特別な注意をその運動遂行のために払わなくてもできるようになることを自動化と呼ぶ。（マイネル・スポーツ運動学、p 470）とし、具体的には、「それらの動きは大きなスピード、安定さ、精確さで特徴づけられ、流れるようで、滑らかであり、まさに軽々と、何の苦もなく、あたりまえのように見えるものである。運動をするときにかならず費やされるはずのたいへんな労力や努力はその動きにはみとめられない。運動が行われていくうちの空間・時間関係の一種の定常性や規則性はそれほど機械的な精確さではないのに、しばしば機械的精確さの印象をよび起こすのである。運動する者の注意はもう運動経過や手足の操作の個々に対しては向けられずに、今度は他の目標に、たとえば、運動の結果や球技ならその戦術に、競技する相手などに集中されるようになる。その注意は新しい課題に対して自由に開かれているのである。」と示されている。（マイネル・スポーツ運動学、pp 401 - 402）

## 第 2 章

### （1）

構は、天・中・地・陰・陽の五形<sup>1)</sup>也。各其一に五の変有り。古伝<sup>2)</sup>に、構を陰陽の二つに定<sup>めて</sup>而、躰中の剣、剣中の躰と云ふは是也。陰の構に陽の変あり、陽の構に陰の変あり。故に其構に得失無し。何れにても手に得、心に応ずる構を以て是を用ふべし。

#### 【語注】

1) 五形...現在いうところの天・地・人・陰・陽の構えであろう。よって、天は「火」の構えで上段、地は「土」の構えで下段、人は「水」の構えで中段、陰は「木」の構えで八相、陽は「金」の構えで脇構え、ということになる。中国の五行説に則るため「五行」の構えともいう。なお、『唯一刀流太刀之巻』においては、これを「五形之位」とし、「陰」「車」「青巖」「下段」「八相」の五つの構えであるとする。このうち「車」は、柳生宗矩『兵法家伝書』にも「初手を車輪と云。是は太刀の構也。まはるを以て、車と名付たり。脇構也（渡辺一郎校注：日本思想大系61 近世藝道論、岩波書店、1972 p303。以下、引用は同書に拠る）とある通り、脇構えである。わかりづらいのは「陰」であり、「構て立たる所の形は陽の姿なれども、上にあるものは下りて陰の理也（pp277）と解説があるので、上段の構えを指すと解するべきか。

2) 古伝...不詳。ここにいう「躰中の剣、剣中の躰」とは、躰中の剣を陰、剣中の躰を陽と解釈し、身体と剣とが一体化する状態、つまり陰と陽とが二つながらに備わる状態をいうものと考えられる。したがって、ここでの陰陽は五形のそれとは異なり、八相、脇構えを指すものではない。

#### 【現代語訳】

構えには、天・中・地・陰・陽の五種の形がある。そのそれぞれに（天・中・地・陰・陽の）五種の変化がある。古伝において、構えを陰陽の二つに定めて、それを体中の剣、剣中の体というのがこれである。陰の構えに陽の変化があり、陽の構えに陰の変化がある。したがってその構え自体に善し悪しはないのである。どの構えでも修得しておき、（折々の）心になかった構えを用いるべきである。

#### 【補説】

剣道における「構え」は、対人運動における複雑な攻撃・防御の運動が即座にできるための姿勢であり、また、潜勢運動<sup>1)</sup>が行われる運動の局面である。

1) 潜勢運動は、マイネルの理論では以下のように解釈されている。

「運動想像力を通して、心的生起のなかで体験される運動経過。運動はあたかも自分でやっているかのように体験される。実際に運動を遂行しなくとも、それを実際にやっているときと同じ状態でとらえた運動が潜勢運動である。（運動学講義，pp 275 - 276）

## (2)

伝に専ら用ふと云ふ構なし。其用捨は己おのれにあり。構を以て利せんと欲する者は、外実にして内必ず虚す。是を以、構に心取らるゝと云ふなり。内外虚実<sup>1)</sup>の差別なきを、当流に無形の構<sup>2)</sup>と云ふ。誤て心を構にとらるゝ者は、合ふ時は即勝つと云へども、不合時は忽ち負く。必勝は構にあらず、事理の正しきに在り。

## 【語注】

1) 虚実…「虚」は空虚なさま。「実」はその逆。ここでは前者を充実するさま、後者をからっぽなさまと解釈してもよからう。『孫子』に虚実篇がある通り、兵法において重要視される概念の一。次項、「無形の構」とともに『孫子』の影響を強く受ける。

2) 無形の構…『孫子』虚実篇に、「兵を形するの極みは無形に至る。無形なれば則ち深間も窺ふこと能はず、智者も謀ること能はず。……夫れ兵の形は水に象る。水の形は高きを避けて下きに趨き、兵の形は実を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流れを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に兵に常勢無く、水に常形無く、能く敵に因りて変化し、勝を取る者、之を神と謂ふ」とあり、孫子は兵には決まった陣形(常形)はなく、水が土地の形によって流れてゆくように敵に応じて変幻自在であるべきをいう。この孫子の思想が「無形の構」に反映されることは明らかであろう。なお、『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝には、「以構合敵之事(構えを以て敵に合する事)」として以下のように説明する。「構を以て敵の所作に合向ふ事利也。……構を以て敵に合すると云ども、其構に着する事なかれ。然ども合して合せざる心持と見るも亦非也。合して合する心なければ、其合する所の術空虚に落着すべし。合すれば合し、離るれば離れたるまでにて、敢て其合離の所作に心を止むべからずと云義なり」。(p287) 構えに執着することを戒め、敵に応じて変化すべきことを説く点において趣旨は同様である。

## 【現代語訳】

秘伝として、そればかりを用いるという構えはない。その取捨選択は自分にあるのだ。構えで勝利を得たいと思う者は、外面的には充実していても内面的には必ずやからっぽとなる。そこでこれを、構えに心を取られているというのである。内面と外面、虚と実の区別がない心境(の構え)を、当流派においては無形の構えという。間違っして心を構えにとられてしまった者は、(その構えがその場に)合った時には勝つただけけれども、合わない時には忽ち負けてしまう。必勝(を期す)は構えにはなく、事理の(理解の)正しさにあるのだ。

## 【補説】

「構え」に心をとられているということは、構える者の意識が、「構え」における手足の操作の個々に対して向けられ、それによって、運動の結果や対戦する相手などに集中されない状況である。「無形の構え」は、このような注意が、心身両面に向けられ充実した状態を指すものであり、運動の自動化がなされている状態を示すものといえる。

## （３）

雖然、構は千変万化<sup>1)</sup>の本<sup>2)</sup>、強弱輕重の体<sup>3)</sup>なり。故に無形の構を能く鍛錬すべし。陰の構にあらず、陽の構にあらず、其形ありと云ども、心其構に止らざるを無形の構と云也。構心に不異之位<sup>4)</sup>と云ふは、無形之全体也。千変万化の事は、物に応じて形を現<sup>げん</sup>ず。是れ其全体無形なるが故也。

## 【語注】

1) 千変万化...変化極まりないこと。

2) 本...本体。みなもと。次項の「体」に対応し、「千変万化の本」強弱輕重の体」の二句が対を成している。

3) 体...前項「本」に同じ。本書では、からだの意の場合は「躰」字を用いることが多い。

4) 構心に不異之位...『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝の「構心不異之事」では、「かまへ、心、一致して、異形のあやつり無くして疑はざる処也。畢竟、構は我心よりなす所也。構心一物と成て転ぜられざる処なり」(pp287 - 288)と解説する。また別の箇所では「劍躰心三の物の虚と実とを正し、勝つ所と負る所の得失を明らむる」(「単刀直入の事」p292)ことを主張しており、これは現在いうところの気剣体の一致に通ずる。なお『不動智神妙録』においても心が何かにとられることを戒めており、「心を何処に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば敵を切らんと思ふ所に心を取らるるなり。我太刀に心を置けば我太刀に心を取らるるなり。我切られじと思ふ所に心を置けば切られじと思ふ所に心を取らるるなり。人の構に心を置けば人の構に心を取らるるなり。兎角心の置所はないと言ふ(同前、p67)と説明する。

## 【現代語訳】

そうはいっても、構は千変万化のみなもとであり、(そして)強弱・輕重のみなもとである。したがって無形の構えをよくよく鍛錬すべきである。陰の構えでもなく、陽の構えでもなく、その形はあっても、心その構えにとどめない状態を無形の構えというのである。構えと心とが一致する位というのが、無形の構の完全な状態である。(構えが)千変万化するの、物に応じて(構えの)形が現れてくるからである。こうしたこと(=千変万化)が起こるのは(構え自体が)まったく無形であるためである。

## 【補説】

「無形の構え」は、「千変万化」に対応できるという。このことは自動化された運動の特徴<sup>1)</sup>である。

1) 運動の自動化の特徴は、マイネルの理論では以下のように述べられている。

「・・・(中略)・・・その運動が高度の自動化に達してくると、スキーヤーやスキージャンパーはゲレンデを常に“目のなか”に入れ、ボクサーは相手を、ボールプレイヤーは状況の全体を、ピアニストや速記タイピストは鍵盤全体を目に入れるのである。(マイネル・スポーツ運動学、p402)

「第一には、空間的、時間的、力動的経過形態の定常性の増大であり、第二には、思考過程による障害を含めた外的内的環境からの妨害作用に対する安定さである（マイネル・スポーツ運動学，pp400 - 401）

「このことと密接な関係をもつのは、運動操作の視覚上のコントロールが運動覚によるコントロールへと部分的に移動してくることである。適切かつ正当に世間でいわれているような表現“血となり肉となる”ように、運動は移り変わっていくのである。（マイネル・スポーツ運動学，p401）

### 第 3 章

#### （ 1 ）

術は、負る所と勝ざる所<sup>1)</sup>を知るべし。負る所と云ふは、先づ勝つ所なり。勝ざる所と云ふは、敵の能く守る所也。其負る所は我に有、勝たざる所敵に有。妄りに勝たんと欲する者は、其負る所を知らず。負ける所を勝たんと欲する者は、敵の勝つ所を知らざるが故也。

#### 【語注】

1) 負る所と勝ざる所...自分に要因があって相手に負けている点と相手がすぐれるために自分が勝てない点。

#### 【現代語訳】

剣術においては、負ける所と勝てない所というのを理解すべきである。負ける所というのは、まず勝てる（と思う）所にある。勝てない所というのは、敵が十分に守りをなしている所にある。その負ける理由は自己にあり、勝てない理由は敵側にある。むやみに勝ちたいと願う者は、自分が負ける理由を理解していない。負けている所がありながら勝ちたいと願う者がいるのは、（その者が）敵の勝っている所を理解していないからである。

#### 【補説】

他者観察<sup>1)</sup>と自己観察<sup>2)</sup>の重要性を示している。観察においては、敵と運動共感<sup>3)</sup>しながら自己と他者の両者の運動習熟の程度や戦術<sup>4)</sup>を理解するのである。

1) 他者観察は、マイネルの理論では以下のように解釈されている。

「外容器、とりわけ視覚によって他者の運動経過を外から観察する方法は、スポーツにおいてよく用いられる。一般に、これは他者観察と呼ばれる。（運動学講義，pp158 - 159）

また、他者観察は、スポーツ指導場面に重要な印象分析の前提となる分析法であり、「印象分析は他者観察の不可欠な前提となる分析法で、運動現象のなかに現れている諸徴表をとらえ、さらに精密な分析研究のための前提を導き出す重要な手段であり、それは即座の印象分析（たとえば運動中の）と後での（たとえばフィルムやビデオから）に区別される。」（運動学講義，pp 158 - 159）と示されている。

2) 自己観察はマイネルの理論では以下のように解釈される。

「とくに運動分析器は、その受容器が筋肉、腱、関節内にあり、内からの運動感覚に関する直

接の体験情報を得ることを可能にしている。このように、運動分析器は運動に関する内からの情報（運動覚情報）を得るうえで大切な役割を果たしている。この内からの運動観察が自己観察と呼ばれる。（運動学講義，pp159 - 160）

３）運動共感は、マイネルの理論では以下のように解釈されている。

「他人の運動を見ていてそれに共感することである。いわば、他者観察の結果の自己観察化である。すなわち、自分の運動を運動分析器によって対象化することはできるが、他人の行う運動を見ていて、その運動映像のなかに自分を投入させ、自己観察としてその運動覚を自分のものとして感じ取ることが運動共感である。（マイネル・スポーツ運動学，pp453 - 454）

４）戦術あるいは戦術力は、マイネルの理論では以下のように解釈されている。

「スポーツにおける戦術は、行動の結果を考慮して、最も合目的に目的を達成する方法を意味する。・・・（中略）・・・戦術能力は、スポーツの競技力を規定する構成要因のひとつであり、その成否は、プレイヤーの心的・身体的能力、運動習熟、そのときどきの心理的状态によって大きく左右される。（運動学講義，p275）

「Taktisches Denken の訳語。試合前に戦術上の行動の仕方を計画していく能力、ならびに、たえず変化する複雑な試合条件のもとで自分の戦術の構想を実現していく能力を Taktisches Denken，つまり戦術力という。この Taktisches Denken の基礎になっているのは、幅広い技能と状況を適切に判断することによって、正確かつ弾力的に戦術図式を適応していくことである。」（マイネル・スポーツ運動学，p463）

## （２）

**我勝たざれば不負，我負ざれば不勝。故に十分の勝に十分の負あり，十分の負に十分の勝あり。勝て負る処を知り，負て勝つ所を知るは，術の達者なり。我が事理を正し<sup>1)</sup>，彼が事理を察し，敵に因て転化すべし。孫子<sup>2)</sup>曰，知彼知己，百戦不殆。不知彼而知己者，一勝一負。不知彼不知己者，每戦必敗。**

### 【語注】

１）事理を正し... 『唯心一刀流太刀之巻』では「蓋事者随流，変動無常，因敵転化，不為事先，動而輒随，故事理正則為全勝（蓋し事は流れに随ひ，変動して常無く，敵に因りて転化し，事を先に為さず，動けば輒ち随ふ。故に事理正なれば則ち全勝を為す）（p272）と説明する。

２）孫子... 『孫子』謀攻篇に典拠するが，通行するテキストは最後の句を「每戦必殆」に作る。

### 【現代語訳】

勝つことがなければ負けることもない，負けることがなければ勝つこともない。したがって十分の勝利（の背後）に十分の敗北（の要因）があり，十分の敗北（の背後）に十分の勝利（の要因）がある。勝って（自分が敵に）負けている所を理解し，負けて（自分が敵に）勝っている所を理解する者は，剣術の達人である。自己の事理を正しく修得し，敵の事理を推察し，敵に応じて変化すべきである。孫子もこういっている。「相手のことを理解し自分のことも理解していれば，百回戦っても危ういことはない。相手のことを理解し

ておらず自分のことのみ理解するものは、勝ったり負けたりする。相手のことも理解せず自分のことも理解しないものは、戦うごとに必ず敗れる」と。

#### 【補説】

このような記述は、運動学における、技術や戦術や戦略<sup>1)</sup>とはいえないが、これらが形成されるための戦術・戦略の哲学、あるいは戦術・戦略の精神、さらには戦う上での心構えと位置づけられる。

1) 戦略については、以下のように解釈される。

スポーツにおける戦略は、行為の結果を考慮して、最も合目的に目標を達成する仕方を意味している。戦略は、相対的に長時間にわたる、あるいは長期間にわたる行為の計画にかかわるという点で戦術から区別される。計画が問題になる行為の抽象化のレベルにしたがって、「国家の戦略」、「チームの戦略」、「シーズンの戦略」、「トーナメントの戦略」、「ゲームの戦略」などが区別される。(運動学講義, p276)

## 第 四 章

### (1)

威<sup>2)</sup>は節<sup>3)</sup>に臨んで変ぜず。其備正明にして、事理<sup>3)</sup>に転ぜられざる全体<sup>4)</sup>を威と云。動ぜずして敵を制するは、威也。是を不転の位<sup>5)</sup>と云。すでに動じて敵を制するは勢<sup>6)</sup>なり。是を転化の位<sup>7)</sup>と云。威は静にして千変を具し、勢は動じて万化に應ず。故に威を以て敵に合し、勢を以て敵に勝者也。

#### 【語注】

1) 威...『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「劍躰備勢之事」では、「威は内に備はる所」と解説し、先師(古藤田俊定)の作と伝えられる歌「威と云は峨々たる山の岨<sup>そば</sup>づたひ恐をなして過りわづらふ」を引用する(p289)。俊定は「威」を、高く聳え立った山の難路を行くことに喩え、「威」は難路が人を通行させる前から怖じ気づかせるような、自然な威圧感であるという。

2) 節...時,折。ここでは敵に相対した時,折の意。

3) 事理に転ぜられざる...事理へと転化することができないもの,事理とは別個のものに意に解した。

4) 全体...ここでの文脈上,「体」と同義と解し,本体・本質の意と考えた。後出,「無為の全体」も同様。

5) 不転の位...敵に応じて変化しない位。敵に左右されない位。

6) 勢...同じく『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「劍躰備勢之事」では,「勢は外に発する所なり」と解説し,やはり俊定の伝歌「勢は唯水の上なる浮瓢さし引く手にぞ随ぞする」を引用する(p289)。「勢」を水に浮かんだ瓢箪に喩え,「勢」は瓢箪が人の差し招く手にしたがって水面を動くような順応性であるという。

7) 転化の位...敵に応じて変化する位。

## 【現代語訳】

威というものは、敵に相対した時に臨んでも変化しない。その備えが正しく明確であって、事理に転化することができないという本質(を有するもの)を威という。動くことなく敵を制するものは、威(の作用)である。こういう状態を不転の位という。すでに動いて敵を制するものは、勢(の作用)である。こういう状態を転化の位という。威は静であって千変をそなえており、勢は動であって万化に対応する。したがって威で敵に向かい、勢で敵に勝つのである。

## (2)

威と勢とは二にして一なり、一にして二つなり。威に勢あり、勢に威あり。不転は無為の全体<sup>1)</sup>、其威十方<sup>2)</sup>に通貫して恐るゝに敵もなく、疑ふに我もなし。不求とも威は自ら我に備り、勢は自ら其威に有り。

## 【語注】

1) 無為の全体... 「無為」は、何もしないこと。人為を加えないこと。ここでは、道家の主張する「無為自然」に通ずるものと考えた。例えば、『老子』第48章に「無為にして為さざる無し」とあるように、道家では人為を加えない無為の状態に達することが、逆になし得ないことがないほどの無限の可能性を有することを説く。また、しばしば剣道家の理想の境地として説かれる「木鶏(『莊子』達生篇)の故事にも通ずるであろう。

2) 十方... 東・西・南・北の四方に、乾(北西)・坤(南西)・艮(北東)・巽(南東)の四隅と上・下を合わせた総称。自己を取り巻く全ての方向。転じて自己を取り巻く世界、宇宙をいう。

## 【現代語訳】

威と勢とは二つでありながら一つのものであり、一でありながら二つのものである。威(の中)に勢があり、勢(の中)に威がある。敵に応じて変化しないとは、無為自然であることを本体としており、その(作用として発せられる)威が十方にゆきわたっている状態であって、恐るべき敵もなく、疑うべき自己もない(状態である)。自分から求めることもなく威は自然と自分にそなわっており、勢は自然とその威(の中)にある(という状態である)。

## 【補説】

「威勢」は対人技能に関わる記述である。「威」とは、相手に与える自然な威圧感である。しかし、「威」は「事理」の習練によって習得されると説明されるものではない。一方、「勢」は敵のどんな動きに対しても対応できる、自動化された運動経過であり、「事理」の習練によって習得された運動経過、敵の運動に即座に対応できる技である。この「勢」の働きによって「威」が生ずると理解される。つまり、「威」とは、「勢」の習練の結果としてにじみでた人間性、あるいは風格、気位といったものであろう。したがって、この「威」と「勢」はそれぞれ別個に存在するものではないといえる。



5) 水月の伝授...本書の解釈とは異なるが、小野派の伝書『一刀流兵法仮字書』は「水月の事」として、「敵をただ打と思ふな身をまもれ しぜんにもるはしづがやの月」という和歌を引いて以下のように解説する。「或は賤といへども、己が漏ると思はねども、事不足してふく(=葺く)故に、月は一天にあれども、自然に影もる也。其如く、敵を討たんと思はねども、己が一身をよくまもりぬれば、悪き処を知らずして己と勝理也。手前の守る事を忘、敵を討たんと思ひ、心躰少々さはぎぬる時は負大ひなるべし(p137)。これを笹森順造氏は、「手前が不如意であるから、随分努力して屋根を葺いても、事が不充分で葺くから月が寝屋にもさし込む。身を充分に守っていると隙間もないが、ただ相手を打とう打とうと思うて自然に己れの守りが不足し隙が出ると、そこを打たれる。月が清く静かで心が明鏡止水のようであると、相手の姿やそのたくらみは、月の光の中の斑点も悉く見えるように手に取るように写るものである。わが心に写ると手に写り手から刀に写り、相手の隙を一刀のもとに制することができる。心が濁つて波立ち騒ぐと写つても歪んで正体を捉え難い。心に雲がかかると、どんなに破れた屋根のように相手に隙があつても、月影がささないように、敵状がわからず打込み得ない。却つて自ら大敗を喫することになる。清く静かな心を養うと相手に少しでも隙があると、それが心の明鏡に写つて打てるようになる。これが水月の教である(『一刀流極意』、体育とスポーツ出版社、1986年重版。pp450-451)と説明する。一方、柳生新陰流においても「水月」の譬喩は用いられ、例えば『兵法家伝書』下巻「水月 付其影の事」では、「敵と我との間に、凡何尺あれば、敵の太刀我身にあたらずと云つてもありて、その尺をへだてゝ兵法をつかふ。此尺のうちへ踏入、ぬすみこみ、敵に近付を、月の水に影をさすにたとへて、水月と云也。心に水月の場を、立あはぬ以前におもひまふけて立あふべし(p325)と解説する。よって、柳生新陰流にいう「水月」は、水面が月を写すように敵の姿を自己に投影し、敵との間合いを見切って攻めるといふことになる。敵との間合いを説くに「水月」の譬喩を用いることは共通するが、唯心一刀流は敵をありのままに捉えることを、水がありのままに月を写す喩えで表現するが、柳生新陰流の方は敵の姿を主体的に自らに投影して間合いを見切ることを、水月の譬喩で表現しており、両者の「水月」の意味するところの相違が見て取れよう。また柳生新陰流は心の持ち様を譬喩して「心は水の中の月に似たり(『兵法家伝書』下巻。p329)というが、これは神妙剣の座を水に喩え、自己の心を月に喩え、月が水に姿をうつすように自己の心を神妙剣へとうつしてゆくべきを説くものである。

#### 【現代語訳】

移とは(左から右へ移動するという意味であるが)、これは月が水面に(その姿を)移動させるようなものである。これを捧心(捧心とは心が物につく意であり、敵との立ち合いにおいて過不足なく進む意である)の位という。(これは相手の心に)着いた状態である。写とは、水面が月を写すようなものである。これを残心の位という。(これは相手から)離れた状態である。道理でこれを示す際には、水月の伝授という喩えがあり、(技術で)これを伝える際には、移・写というのである。

#### (2)

眼を以て見る所を自付<sup>めつけ</sup>と云、理を以て守る所を移と云、事を以て攻るを写と云なり。

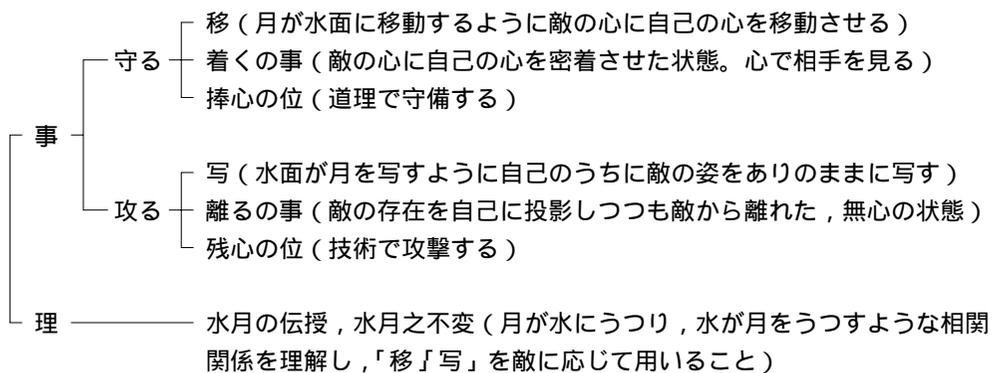
水月に遠近の差別なし<sup>2)</sup>。若し遠近を攻んと欲する者は、却而移を失す。是を移に心を取らるゝと云ふ也。心は水月之不變に至り、事は敵に因て捧残の宜しきを用ふる時は、不勝と云事なし。月無心にして水に移り、水無心にして月を写す。内に邪念をなさずば、事能く外に正し。語に曰、「一月一切之現水、一切之水撰一月<sup>3)</sup>」。

### 【語注】

1) 目付, 移... 『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「移目付之事」では、「眼を以て見るを目付, 心を以て見るを移と云(p288)と定義する。これに従えば、「移」は心の働きによるものであり、敵に対して未発のところを衝くための心構えと解することができる。そのことを『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「移無遠近之事」では、「いまだ一剣を提<sup>ひっさげ</sup>ざる以前、構・形あらはれざる先に移りたる所也(p288)と解説する。

2) 水月に遠近の差別なし...水面と月との間合いには、遠いとか近いとかの区別はないこと。つまり、両者の間合いが近いから月が水面にうつり、遠いから水面にはうつらないというような距離の遠近に、水面と月との関係は左右されないことをいう。これは剣でいえば、敵との距離の遠近に左右されず、その間合いに応じて移動すべきことを説くものであり、『唯心一刀流太刀之巻』事理之口伝「移無遠近之事」においても、「遠きは遠きに随ひ、近きは近きに随て移る事(p288)を主張する。

3) 一月一切之現水、一切之水撰一月...唐、永嘉玄覺禪師『證道歌』に、「一性円通一切性、一法偏含一切法。一月普現一切水、一切水月一月撰(一性は円く一切の性に通じ、一法は偏く一切の法を含む。一月は普く一切の水に現し、一切の水月は一月を撰す)」とあるを踏まえる。この『證道歌』では、一つの性情があらゆる性情に通じ、一つの法があらゆる法を内に含むこと、つまり一事が万事がに通ずることを比喻して水月のたとえを用いる。『證道歌』は禅の悟りを歌唱のスタイルにしたもので、日本の禅林においても愛好された。なお本章で示された事理、水月の譬喩の関係を略記すれば次のようになる。



### 【現代語訳】

目を用いて見ることを目付<sup>めつけ</sup>といい、道理を用いて守ることを移といい、技術を用いて攻めることを写というのである。水と月との間合いに遠い、近いの区別はない。もし(間合いの)遠近によって相手を攻めようとする者は、逆に移ということをして失ってしまう。この

ことを移に心を取られてしまった状態というのである。心は、水と月とが不変の関係にある、その境地に至り、技は敵に応じて捧心・残心、いずれか良い方を用いる時には、勝てないということはない。月は無心に(その姿を)水面に移動させ、水面は無心に月の姿を写し出す。内面において邪念をなすことがなければ、技は外面において正しいものとなり得る。(『證道歌』の)言葉に次のようにいう、「一つの月は全ての水面に現われ、全ての水は一つの月を内にとりこむ」と。

### 【補説】

ここでは、「移」、「写」、「捧心」、「残心」、「水月」という対人技能に関わる理論が示される。

「移」は、心を物につけるという意味で、「捧心」といい、敵の状態を観察することであり、防御の際の心境である。具体的には、現代剣道の応じ技の発現につながるものである。「写」は、無心に相手の姿を自己の中に写すという意味であり、「残心」といい、相手を攻撃することであり、攻撃の際の心境である。具体的には現代剣道の仕掛け技の発現につながるものである。

「水月」とは、技術指導上の用語である「移」と「写」についての寓話的な解説であり、これらの「理」を示す用語である。

「残心」は、現代の剣道の世界でもよく使用される言葉であるが、この「残心」は、「捧心」と対になる言葉で、水面が月を写すように、自己の心の中に相手の姿を残すという意味である。この使用法は、現代剣道で使用される意味と異なるといえる。この点については、今後の課題としたい。

## ま と め

現代の剣道指導書の先行形態と考えられる「一刀斎先生剣法書」を現代訳し、その技術に関する名辞の意味・内容をマイネルのスポーツ運動学の視点から考察し、以下のことが明らかになった。

1. 「事」は、狭義には、技術ではなく、課題遂行の運動経過や運動形態を示すものである。
2. 「理」は、最高の習熟を示す運動経過や運動形態を構成する理論である。そして、「水月」のように、剣道の世界に限定されない一般的な比喻で寓話的に示されるものである。
3. 「事理不偏」とは、運動の自動化を意味するものである。
4. 「残心」は、敵の姿を自己に映すという意味であり、現代の意味と異なるものである。
5. 「威勢」は、「威」の中に「勢」があり、「勢」の中に「威」があるという関係である。また、「威勢」は道家の説く「無為自然」の思想を伏在させている。

## Summary

**TAKEDA Ryuichi<sup>1)</sup>, NAGAO Naoshige<sup>2)</sup>:**

**Translation with notes of “Ittousai sensei kenpousyō(「一刀齋先生剣法書」)”  
and some considerations from the sport pedagogic viewpoint ( 1 )**

In this report, we gave the modern Japanese translation to “Ittousa sensei kenpousyō(「一刀齋先生剣法書」)” from chapter 1 to 5, which was written by KOTOUDA Toshisada(「古藤田俊定」), and also regarded as the precedent form of the modern kendo instruction, And we tried to examine the meaning and content of the term of the technology in “Ittouryu(「一刀流」)”.

1 . “Waza(「事」)” does not mean some technic, but shows the movement or motion to achieve the maximum result.

2 . “Kotowari(「理」)” is the theory which constitutes the movement showing the maximum mastering. Then, it can be shown by the metaphor “Suigetsu(「水月」)”, which means the relation of the surface of the tranquil water and the Moon. Here “Kotowari(「理」)” is not limited like “Waza(「事」)” to the world of the kendo.

3 . “Zirihuhu(「事理不偏」)”, which means the situation combined “Waza(「事」)” and “Kotowari(「理」)”, seemed to be the automatic movement or motion.

4 . “Zansin(「残心」)” means the situation reflected the figure of the enemy to himself. It is different from the meaning of the term of the present kendo.

5 . “Ise(「威勢」)” is composed of “I(「威」)” and “Se(「勢」)”. “I(「威」)” includes “Se(「勢」)”, similarly ” Se(「勢」)” includes “I(「威」)”. “Ise(「威勢」)” also potentially receives the theory of the Chinese Taoism(「道家」)

1 ) Section of Lifelong Sports, Faculty of Education

2 ) Japanese, Faculty of Education